

幼稚園のおひなまつり

片岡 靈 恵

まえがき

二月中旬には、短大の学年末考査が終わるので、それから、学生に幼稚園の見学や参観をさせたいと思い、お願いに行くと、「おひなまつりの準備でいそがしいので」とお断りをいただくことが多い。または「生活発表会を卒園式の前にするものからです」とか、お別れ会やら、卒園記念アルバム製作など、とにかく、二月の終りから三月上旬にかけて、幼稚園は大変いそがしいようである。

そのいそがしさをこそ見せていただき、できる範囲で、先生のお手つだいでも……と、思って、なおお願いすると、「もうメチャクチャにいそがしくて、保育らしいことしてませんので。当日には何とか格好がつかますからその日に来てください」とおっしゃる。こちらは、未熟な学生たちが数人もおしかけ、お

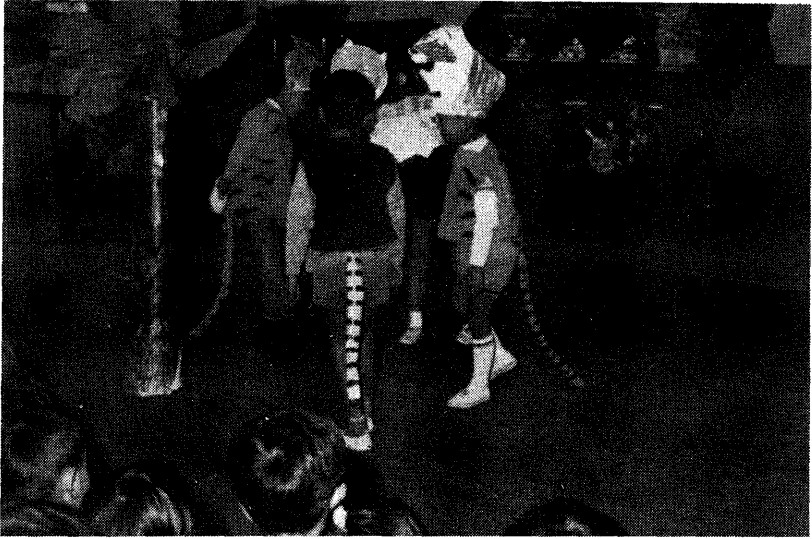
邪魔な迷惑をかけるので、そのようにいわれると、引きさがるよりほかはない。

ただ、これは、三月に限らない、たしか、春には、「母の日の行事で」とか、夏は「七夕まつりで」、秋は運動会、冬はクリスマスと、行事のあるころ、いつも経験することなのである。

保育の現場をはなれて十年近くなる私だから、ピントがはずれたことを考えているかもしれないが、幼稚園のおひなまつりという題をいただいたので、年中行事と保育カリキュラムとの関連についても若干の考察を試みてみたいと思う。

一、ひなまつり—生活発表会

毎年、二、三の幼稚園から、ひなまつりへの招待状をいただく。かわいらしいデザインのカードに、盛沢山のプログラムが並んでいる。大体、十時にはじまって、十二時ごろまでかかる



見当である。大きな幼稚園になると、遊戯室が狭いからとの理由で、二回に分けたり、市内のホールや劇場のようなところを借りてする場合もある。プログラムは、歌やダンス、リズムバンド、オペレッタ、それから劇あそびなどが並び、人形劇や映画を業者にさせたり、お母様方のコーラスや劇などを加えている園もある。

一度、劇場を借り切って催されたひなまつりに行って見ておどろいた。午前の部、午後の部と、一日中あり、家族がお重詰めのお弁当もちで行くのである。ステージには、ドーランを塗り衣装を着せてもらった園児が、次々と出て来て、レコードに合わせて、踊ったり、マイクを使って、劇らしいことをしたりする。照明のライトが光り、写真のフラッシュがきらめく。

わたくしは、とにかく、びっくりしてしまい、このような幼稚園の先生も親も、どんなにしんどいことだろうと同情した。でも、商店街にあるこの園は、家庭には大変評判がよくて、いままも盛大に、このやり方をしてしていると聞く、

幼稚園のホールにするひなまつりは、これほどはないにしても、形式、内容は、同様だと思う。お母さん方の目は、ステージ上のわが子だけを追い、先生方は、自分の組の出し物が、うまく行くようにと一生懸命である。

そして、おひなさまは、わきの方で、ほこりにまみれている。三月という時期だからであろうか、いわゆる、生活発表をかねることや、お別れ会、または、新入園児を招待するのに、ひなまつりが利用されることが多い。もちろん、こういった行事はそれぞれ意義があり、教育的な評価もあるからこそ、行なわれているのだと思うが、その内容が、ほんとうに、こどもたちの、この時期の成長や発達にふさわしいものかどうか、よく検討されているだろうか？ どうも、私には、このごろの幼稚園の行事の内容に、ショー的な要素がふえてきているように思われてならない。一年に一度ぐらい、大勢の前に立つて自分自身を表現し、発表するという経験をさせることは必要だし、大変よいと思うが、大体の園では、三、四回はあり、先生の負担とこどもの疲労が多いように見受けられる。

二、保育らしいこととは？

「保育らしい保育ができない」という言葉の裏には、ふだん着の、何事もない平日の幼稚園の生活こそ、本当の保育のできる場なのだという意味があるようだ。たしかに、特別の行事を控えている数日は、こどもたちも、先生も、胸を高鳴らせ、また緊張する。特に、先生は、あれもこれもと気を配り、からだもこまめに動かさなければならぬ。そして、その行事を立派にするためには、平生の細かな生活指導や、一人一人の個性を育てる保育の面がいくらか抜けてしまうのであろうか。そしてそのようなちよつと、うしろめたい先生の気持が、「保育らしいことしていないので」という言葉になるのであろう。

しかし、私はこのように考えたい。こどもたちも教師も、クラス全体が、また、園の皆が、一つの目標を目ざして、精一杯いきいきとして活動する日々こそが、ほんとうの保育の日々であるはずだ。劇に使う小道具をつくるのに熱中して、外遊びの時間がなくなってしまうたり、リズムバンドの楽器が足りなくて、積木で代用することを考えたり、とにかく、皆が、積極的に、協力する生活が、営まれていけば、そこに少々の時間的、空間的な乱れが見られようとも、それは、やはり保育らしい保育であろう。

大切なことは、行事のような生活のアクセントを、どのくら

いの間をにおいて、また、どんなやり方で、とり入れるかをよく考えることだと思う。

三、年中行事を考える

現代社会における年中行事は、変わってきた。その種類も、また、あり方も、年々違ったものになってきている。ひなまつりに限らず、お正月、節分、七夕、お月見といったような季節の変化を印象づけるような行事や、彼岸や、お盆、クリスマス、イースターといった宗教行事、また、主として神社中心の地域の祭まで、一年のカレンダーのほとんどを埋めるくらいの数があるが、これらの行事を一夕追いかける必要のないのはもちろんである。

元来、社会的な年中行事は、同じことの繰り返しになりやすい人間の生活に変化を与え、季節の区切りや、社交生活の折目を教えると共に、人々が集まって楽しむリクリエーションの意欲ももっていたようだ。しかし、社会の仕組が複雑になり、生活のテンポがはやまってきて、わたくしたちは、何事も、インスタントに片づけようという傾向になってきた。そこで、年中行事に伴なって、食べる物、着る物の準備や、家の内外の飾りつけなども、自分でつくることをやめて、買ってきますますと

いうことになる。コマージュリズムが、それに輪をかける。中には、もう滅びかけていた行事が、デパートの宣伝で復活したなどの例もあるくらいである。

学校や幼稚園が、年間のカリキュラムに組み入れる行事は、教育的な価値をもつものとして厳選されるはずであるが、また、長年の惰性から、踏襲されているような行事がないでもない。ひなまつりも、その一つと考えられないだろうか。人形をかざって、その前で、女の子たちが、楽しくあそぶという本来のひなまつりを、現在の多くの幼稚園のような盛大な、おゆうぎ会や「生活発表会」に置きかえるのだったら、むしろ、ひなまつりは、家庭に返してしまつた方がよいと思う。五月の節句、母の日、七夕、お月見、節分、誕生日なども、同様なことがいえるよう。

母親たちは、幼稚園に出て行って我が子を見る機会をへらして、そのエネルギーを、家庭の楽しみを削り出す努力に費やしてほしい。そして、先生方は、見せもの本位の行事でない行事を、こどもたちと共に楽しめるような方向にもってゆくべきだと思う。「なぜ、ステージで歌ったり踊ったりさせてはいけないのですか。こどもたちは、とても喜んで楽しんでいるのですか」とおっしゃる先生もあるが、そういう先生は、客席にす

わっていた経験のない方だと思ふ。うしろから見ていると、出番のすんだこどもたちは、すぐあきてしまつて、じつと待たない。お友だちの歌をきいてあげるなどというエチケットを期待するおとなの方が無理なのである。お母様方も、自分のこどもの出演だけ見れば、もう用はないので隣の人とおしゃべりに夢中になるのはいい方で、さつさと帰つてしまふ人さえある。

このような行事を何度やつても、骨折損のような気がしてならないのは、私だけだろうか。

四、米国の幼稚園で

米国の幼稚園にもいろいろあるので、一概にはいえないが、大体において、日本の幼稚園の空気よりも、のんびりしている。日本では、どの町でも、幼稚園を訪ねようと思えば、こどもの声が、またはレコードの音楽が聞えてくるのですぐ分かるのに、米国やヨーロッパの国々では、そうはいかなかった。こどもの数が少ないこと、建物の構造の関係もあるが、とにかく、静かに、おちついて、ゆつくりと遊びに熱中している姿が印象に残っている。そして教師は、あまり動きまわらず、しかも注意は配っているのだが、こどもの方から何かいってこないかぎり、こどもに話しかけない。ピアノやオルガンのような鍵盤楽器も、

クラスに必ず備えられているわけではなく、静かなのは、そのためもあるうか。いわゆる、行事や催しなどもほとんどなく、入園や卒園も式のような形式はとらないようである。時には、パーティーをするが、大抵は、教室内でそのクラスのこともと先生だけで楽しむのである。私が週に二日ぐらい、參觀に行つていた五歳児のクラスが、二月十日にバレンタインの日のパーティーをすると張り切つて準備をしていた。赤い紙でハートをいくつも切り抜いて、まわりにリースペーパーの飾りをつけたカードに、毎日せつせと、自分の名前を書いて、友だちの名前が書けなければ、先生に書いてもらい、バレンタインボックスに入れていく。かれこれ一月ぐらいつづいたであろうか、その間、先生は、特別にいそがしそうでもなく、こどもが帰つてから、バレンタインボックスを開けて、誰が誰にカードを送つたかをしらべ二枚ももらえない子どもがいないようにチェックするぐらいのことだった。いよいよ当日になり、何か、暗れがましいことが起こることを予想して行つた私の前にくり広げられたパーティーは、何のことはない毎日のジュースに代わつてアイスクリームが配られ、紙ナプキンに赤いハートの飾りがついただけ。やがて、皆の見守る中で、ボックスが開かれ、先生が、一枚ずつ名前を呼んで、カードを渡しはじめると、こども

たちの目は期待で一杯になり、ありがとうといって抱き合う子もいれば、何枚もらったと踊り歩く子もいるというように、楽しい気分が盛り上がったところで、「ハッピーバレンタイン」の歌を皆で歌って、終りになった。先生が、一番よく字の書けるナンシーに書かせたらしく、私もきれいなカードを一枚ただいて、生まれて始めてのバレンタインデーの思い出になったことである。

日本の幼稚園のお祭りさわぎになれた私たちは、物足りない感じがしないではないが、本当の意味で、こどもの心を育て豊かにする経験や活動とは何であろうかと考える時に、このように素朴な行事のやり方も参考にすべきだと思う。

おわりに

どこかで春が生まれてる、どこかで芽の出る音がする……こんなのおんびりしたメロディーを口ずさみながら、明日、こともたちにつくらせるおひな様のかたどりをしていると、「先生、今日も、あられが半分ぐらいへってます」とお掃除をすませた先生が、職員室にはいつて来るなりいう。「どうも、〇〇ちゃんたちがあやしいわ。食べるのかしら、それとも持って帰るのかしら」「明日は、このままにしておいて、こどもたちと話しあ

いましよう」その結果はどうなったか忘れてしまったけれど、私の現役時代のひなまつりの思い出といえば、このくらいである。あとは、当日、人形芝居をしてあげようと準備をしている夜半までかかった時のこととか、雪国の三月三日には、桃の花がなくて、紙でつくったことなど、もつとも、小さい幼稚園だったからかもしれないが、あまり大きわざをした覚えがない。

もちろん、世の中は刻々変わる。現代は、そんなのおんびりした気分では暮らせないといわれる。しかし、古いもの必ず悪いとはいえず、新しいもの必ずしもよいとはいえない。保育のあり方にも、変わるべきことと、変わらないことがあると思う。時に、古い卒業生の先生方から、「保育科の授業の内容は、私たちのところと全然変わってません。もつと新しいことを教えてください」とお小言をいただくことがある。古い伝統にあぐらをかいて、新しい社会の変化に適應しようとしなのは考えものであるが、古くても、よいもの正しいものは残しておきたい。だが、何が、ほんとうによいものかを見きわめるのは、大変むずかしいことだと、しみじみ思うこのごろである。

(平安女学院短期大学)